

第14回 桃太郎カップ水球 【戦評】

会場：倉敷市屋内水泳センター

【2021/12/27】

男子決勝

神奈川選抜 16

5	—	0
3	—	3
4	—	3
4	—	3
PSO		

9 京都府選抜

審判： 荻野 浩明
宇田川 佑里子

神奈川選抜	40	SH数	40	京都府選抜
	13	速攻数	2	
	13	ST・SB	9	
	9	SH・P誘発アシスト	14	
	59%	GK阻止率	47%	
8	EX反則数	7		

ST・SB：ボール奪取・SH阻止

【試合の流れ】

神奈川の速攻主体の攻撃をどう京都が防ぎ、京都の攻撃では得点源の井上にどういった形でシュートにつなげるかという攻防が予想され、特に京都側ディフェンスがポイントとなる第14回大会の決勝戦。

1P

試合序盤から神奈川は速攻を仕掛け、京都は自陣に釘付けされる展開。神奈川でカウンターを繰り出す選手に京都が2名戻る形となり、たとえ神奈川の速攻が成功しなくても京都が攻め上がるには人数も時間も足りない状況が繰り返された。完全に神奈川のペースとなり、京都の井上はほとんどシュートを打つ場面もなく、神奈川の攻撃に圧倒された第1ピリオド。神奈川得意のGK吉村からのロングアシストパスも再三にわたって出され、京都側には大きなプレッシャーとなっていた。京都は退水攻撃時のシュートが左0°に限定されてしまい、そこは確実にGK吉村がセーブ。京都は完全に攻め手を失ってしまった形となった。

2P

京都はセンターボールを取ってから退水を取ってから井上が決めてようやく1点を返すが、京都の攻撃時のミスを突かれてまたもや速攻で神奈川が切り返すという展開は第1ピリオドとほとんど変わらず、試合は点差以上にやや一方的な様相を呈してきた。それだけ神奈川が攻撃にプレッシャーをかけ、京都が攻撃する際にもディフェンスからの圧力でミスを誘ってカウンター攻撃という展開が続いた。前半を終えて神奈川8-3京都。この差を京都が詰めていく道はかなりの険しさが予想された前半であった。

3P

5点差となれば、第1ピリオドほどの神奈川のプレッシャーは弱くなり、京都側も攻め込める場面も増えたことで、シュートの本数はそれまでの8本レベルから12本と増えたが、井上以外のシュートは決め手を欠き、そこも確実に神奈川に狙われて失点を重ねるなど、なかなか京都らしい展開に持ち込めず、結局このピリオドも点差が広がった形で、神奈川12-6京都というダブルスコアで最終ピリオドへ。

4P

余裕のある神奈川は、「取って、取られて」ゲームでこのピリオドも終始主導権を握り、後半、中学生世代メンバーでもディフェンスからの積極的な展開で、そこを角野が見事にセンターシュートを決めるなど、終始、ハツラツとしたプレーで京都を圧倒。終わってみれば神奈川16-9京都という結果で、神奈川が第2回大会以来の2回目の優勝を遂げた。

この神奈川は今年になって高校生世代でチームを編成できるようになり(県立神奈川工業高校)ジュニア時代からのクラブメンバーで構成していて、チーム内の意思疎通や連携は他を圧倒している。その高校部活動も実際にはクラブでの活動となっており、県教委による外部指導者制度による活動となっている。ある意味、新しいスタイルのクラブチームであり高校部活動ということで、社会から注目を集めてきており、そのチームが全国大会を制覇するという結果は、水球界だけでなくスポーツ界全体への影響も大きなものがある。

【プレー分析から】

データとしての差は速攻数に如実に現れていて、この攻撃圧力の差が得点差以上の違いを感じさせるものがあった。こうした展開はある程度予想されていたが、それでも神奈川のメンバー全員が手を抜くことなく、積極的な飛び出し、さらには全力での戻りに徹することで生まれた差でもあった。

またこの試合でも重要な場面で繰り出されたのがGK吉村からの速攻へのアシストパス。タイミングを誤ると、速攻選手の前には届くがそれが相手GKにスチールされる可能性もあり、簡単そうに見えても何回も繰り出せるパスではないが、それを神奈川の武器にできるくらいの練習の積み重ねの賜物であろう。

京都はやはりエースの井上の得点頼みの展開となってしまったが、プレッシャーを受けながらのプレーでパスミス等も多くなってしまったのが惜まれる。ボールキープ力はあるが、繰り出すパスの意図は必ずしもチームで理解されているようには感じられない場面もあり、そうしたことが結果的に相手ボールとなったことを考えると、相手の神奈川のプレーから学ぶことはあったのではないかと思われた。